



余呉町 小原かご

～代々受け継がれてきた

技術を再び～

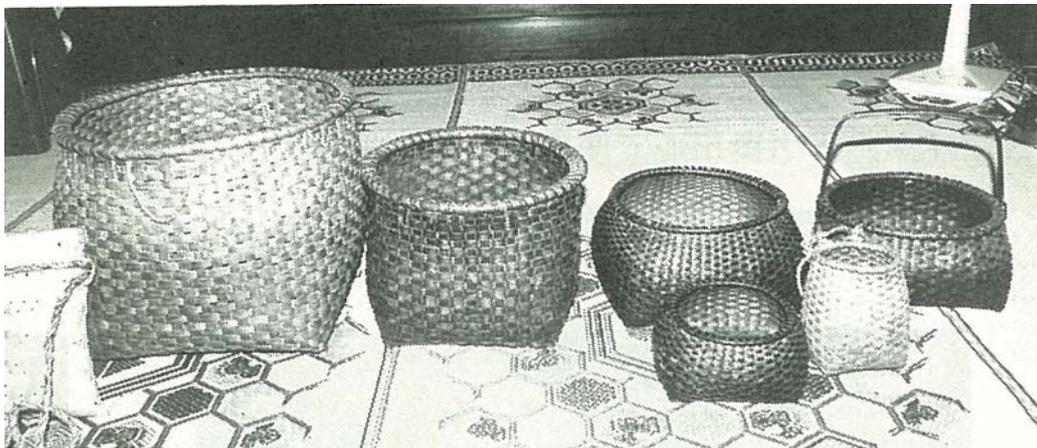
小原かごを復活させる会

～ 余呉町 小原かご ～

今では「かご」というと竹や荷造り紐で編んだものが主流となっていますが、その昔、余呉町の小原や奥川並などでは木を編んで作ったカゴがありました。

その中でも小原の「小原かご」は、奥川並のカゴとは違い、それにまつわる言い伝えもあり、作り方も長男にしか教えなかったと言われていました。

かごは、生活に必要な道具の一つであり、大きさ形などの違いによっていろいろな呼び名があり、いろいろな使い方をされていました。



ツボカゴは、桑摘みや茶摘みに使うカゴ

ナタカゴは、ナタを入れるカゴ

ハリカゴ、ツギカゴは、針仕事の針やボタンなどの道具一式やつぎはぎの布がはいって嫁入り道具として持参したカゴ、最も高級なカゴ

ゼニカゴは、釣り銭を入れるカゴ

チンカゴは、子供のおやつを入れるカゴ

テサゲカゴは、配り物をするとき使用するカゴ

マメカゴは、マメなどを入れるカゴ

コエサシは、肥料のニシンを入れるカゴ



「テサゲカゴ」

フゴは、幼児を入れておく育児用のカゴ
ハリカゴ、ツギカゴ、テサゲカゴ、マメカゴなどは注文があるとモミジを使いよい物を作ったと言われて

かまっています。
カゴを作る材料は、カエデ科の種でイタヤカエデ（地元では板木といわれ、シロイタギやクロイタギがあります）やモミジを使用します。

できたカゴにしぶを塗ると百年も使用できるほど丈夫で長持ちします。

しかし、このカゴも生活様式が変わり、プラスチックや布製品に道具が変わり、今から約30年前には、ほとんど作られなくなり、今では作れる人も1人しか居なくなりました。

昔は、冬、雪のある4月頃までの間に、家でできる量の丸太を秋に切ってきて、冬の間中かご作りをしていたそうです。

また、木を切る時期も暦の上で「はっせん」に木を切ると虫が入りよくないとされこの時期をはずすようにしていました。

小原かごは、他の木カゴと比べるとカゴを編む板材に特徴があり、それによって日に乾かして再度締め直したカゴは水も漏れないほどよい物ができる。

そして、このカゴを作る技術を大切に子孫に伝えていくために、家族の長男にしか伝えてきませんでした。

あまり多くの人に伝えていくと、この技術がどんどん変わっていくと考えたのでしよう。

そして、この技術を最初に教えてくれた人に対する感謝の気持ちも受け継がれていたのだでしょう。



大きい方が「フゴ」
小さい方が「マメカゴ」



「ゼニカゴ」

～ 白子皇子のお話 ～

丹生川（高時川）沿いに遡ると、小原に入る手前西側の山には御所ヶ平、屋敷ヶ平、君ヶ谷、鈴谷など意味ありげな小字名が続いている。ここにはある話が伝えられている。

それは、今から800年ほど前、都からある高貴な方が、世を避けて小原の山中に入ってこられました。そして丹生川辺りの空き地を見つけると、そこに家を建てて住まわれたのでした。お供の人たちは忙しそうに立ち働いていましたが、その家の主は人前に姿を現すことはなかったそうです。けれどもお供の人たちの様子から、大変偉い人であることは村の人にもわかりました。

村の人たちは、この付近では今までに見たことのない人々なので、はじめは好奇心から遠くから眺めていましたが、そのうちにこの人達に協力して木を伐ったり、家を建てたり骨身をおしませず手伝ったそうです。家が建ってから後も、かわるがわる食べ物を運んだり、薪を伐ったり、何かと世話をしていました。そのうちに村人達は異様なことに気づいたのでありました。それは、この家の主が普通の人ではなかったのです。それは、髪の毛もまつげも真白で体の色も白い、俗に言う白子だったのです。

村の人たちは、大変驚きましたが、お供の人たちの一生懸命な説明で、ようやく様子がわかってきました。事情がわかると、純情な村の人たちですから、この薄幸の主の同情し、今までにも増して世話をするようになりました。そして誰いうともなく白子皇子と呼ぶようになりました。

王子も自分の身分や白子のことが村の人達に知られると、もう身を隠そうとはしなかった。村人の中にまじって、苦楽を共にするようになった。手先の器用な王子は山からアテノ木（モミジ科）を見つけだし、木を薄く剥いで木篋を作ることを考え出された。そして、小原の人達にも篋を作る事を教えました。

これが、小原の人達に伝えられてきたあの美しい篋のはじまりだそうです。

都をのがれ、山の暖かい人達の心に支えられ日々を送っていた薄幸の王子は、生まれつき蒲柳であった。気象環境の悪いこの地の生活が影響したのか短い生涯をこの地で終えられました。高貴な方なので王子の遺骸は菅山寺に運ばれ、菅山寺のお坊さん達により丁重に葬られたと伝えられています。

王子が世をのがれ暮らしておられた館のあった場所を御所ヶ平、お供の方の屋敷のあった場所を屋敷ヶ平、王子がよく行かれた山を君ヶ谷、また、吹く風の音が都で聞いていた鈴の音に似ていると、都を懐かしがられた所を鈴谷と呼ばれ今も小字名として残っているのです。

鎌倉時代、土御門（つちみかど）天皇の中宮であった陰明門院（いんめいもんいん）が天皇を誕生されたのですが、そのお子さまが白子王子だそうです。

陰明門院も菅山寺で仏門に入られ、ここで58歳の生涯を終えられたとも伝えられています。

そして、今も菅山寺の境内には、白子王子と陰明門院のお二人の墓が残されています。

※既存の文献より、陰明門院については共通してその存在については明確になっているところであるが、ホームページや菅山寺の縁起書・広報余呉などによると土御門天皇は82代だったり83代だったり、または第87代後嵯峨天皇の説もあったり、白子王子については余呉町関係の資料には記載があるが皇室の中にはその存在が不明だったりしており、明らかになっていない部分も多くあります。このため、この文章については、これらの不明な点も踏まえ「小原かごを復活させる会」において本文を整理したものです。

～ 小原かご作り ～

小原かご作りは、作り方をその家の長男にしか引き継がないと言う小原地区でも特別な取り扱いをされていたものです。

このため、各家毎に細かな点で言い伝えられ方が違うことも想定されますが、今ではそれを確認することができるほどの作り手は残っていません。

実際に「小原かごを復活させる会」の活動を行うこととなった平成20年には長男として引き継がれた方は1人もいないという状況です。

唯一、長男ではないですが、見よう見まねで覚え、作っていた太々野功（ただのつとむ）氏がおられたので、その方に今回は講師として教えていただいていた。

また、籠の作り方は、文章と写真では十分に伝えることができない部分が多いため、その特徴などを整理したものだと思っていただければ幸いです。

材料調達

材料はカエデ科です。

特にモミジは粘りがありナタカゴや上質の籠をつくるために使われていました。

一般的にはイタヤカエデを使用しています。

木の中でも根本から上の1部しか使用できません。これより上の部分や枝については粘りがなく材料の加工やかご作りに適さないということです。

また、節や傷がなくねじれていないものを選び使用します。



イタヤカエデ



イロハモミジ



節や傷がなくねじれていない幹

材料の作り方

伐ってきた丸太を木製のくさびで割っていきます。

割った丸太は、ナタを使用し板材の幅にそろえます。



木製のくさびで木の繊維を切らないように割っていく



板材の幅に揃える

この材料を薄く剥ぐことで板材を作る原材料ができます。

剥ぐときは、年輪にそって半分、そのまた半分といった具合にできるだけ薄くしていきます。

曲がった木は曲がったなりに板材として使用します。



歯も使って薄く剥いでいきます



板材を薄く剥ぐ

これを特別な包丁で指の間隔を頼りに板表は山を付け、板裏は平らに削っていきます。

最も厚いところでも 1mm 程度まで削っていきます。

こんな板材をとにかくいっぱい作ります。



板材を薄く剥ぐ

かご編み

いっぱいできた板材から必要な材料を選んで、再び板材の形を整えながら編んでいきます。

最初は格子状に編み、そのうちの1枚を横に編み込んでいきます。

縁に近づくとつれ細い板を使用することにより、より目の詰まったきれいな籠ができるそうです。曲がった板を使うことによって口をすぼめて行くことができます。

最後に籠の縁を編みます。

違う種類の木の枝をそれぞれ半分に割り籠の縁を挟み込むようにして編みます。

そして完成です。



最初は格子状に編んでいく



横を編んでいく



縁を編んでいく



完成！！

このほかにもここには書ききれない細かな作業や文章で表現しても分かりづらい作業の工程がたくさんあります。

父親が長男にしか教えない技です。

本当は籠の作り方以外にもたくさんの思いや経験も合わせて伝えられていたのでしょう。

おしまい